「水辺とアートの街」
天王洲エリアの活性化を目指す

天王洲・キャナルサイド活性化協会　三宅康之理事長に聞く

東京都品川区北東部の京浜運河、天王洲運河に面した沿岸に位置する天王洲アイル。1990年初頭からの開発がひと段落した現在、景観や域内の資源を活用した文化、芸術発信の地として注目を集めている。東京のどのエリアとも異なる風景、芸術的な風情が漂う同エリアで、天王洲・キャナルサイド活性化協会は観光を主軸に据え、新たな天王洲の姿を地元企業や住民とともに形成しようとしている。同協会の理事長・三宅康之氏に、協会の歩み、現在と未来などについて聞いた。

この30年間で天王洲アイル一帯は大きな変化を見せ、また新たな姿を見せようとしている

――天王洲・キャナルサイド活性化協会のこれまでの歩みについて。どのような旗印のもと、跡見学園女子大学、パナソニックとの3者による産学連携を形成し、どのように連携を進めてきたか。

1990年代、ウォーターフロント最先端都市として再開発が行われた天王洲。オフィス街だけでなく、居住空間やレストラン、劇場まで完備した複合施設が建ち並び、東京の夜景が一望できるホテルも備え、一躍トレンディスポットとなりました。時代の波に乗り大きく変貌を遂げた天王洲でしたが、2000年代に入ると都心に多くの複合型都市が開発され、徐々にそれらの都市に人が流れていきました。東京モノレールとりんかい線の乗り換え駅で羽田空港や品川駅、都心へのアクセスの良さを持ち、都会のオアシスであった街は、オフィス街の機能を果たしながらもにぎわいを失いつつありました。

しかし、天王洲の運河沿いにあるレストラン（T・Y・HARBOR）だけは、連日にぎわいを見せていました。お客さまは食事だけでなく、水辺でゆったりと過ごすひと時に感動し、都内はもとより日本各地から訪れていたのです。2012年、寺田倉庫が水辺の再開発を皮切りに天王洲リニューアルプランを提言し、そのプロモーションを担うべく誕生したのが、天王洲・キャナルサイド活性化協会です。

＜地域活性化イベント「天王洲キャナルフェス」の誕生＞

天王洲をにぎやかな複合型都市に戻すには、開発のコンセプトでもある「水辺とアートの街」の魅力を再びフォーカスすることが必須でした。2015年、運河沿いの水面を活用した水上施設やボードウォークが整備され、新たに天王洲アイル第三水辺広場が完成しました。運河に恵まれたロケーションを最大限に生かし、新しいおしゃれなスポットが誕生しましたが、閑散とした街に変化はありませんでした。何とか人を集めなければと地域の有志が集まり、この場所でにぎわいづくりの挑戦が始まりました。

2016年春、パナソニックの協力をもとに実施した、天王洲運河越しへのプロジェクションマッピングの投影実験が最初の挑戦でした。水辺景観を生かしたプロジェクションマッピングは、対岸のビルの大きな壁面を彩り、さらに運河の水面への映像の映り込みも併せて美しい景観を創り出しました。その次には、日常的な夜間の景観演出を施すために建物や橋のライトアップを推進しました。そして同年の夏、水辺のプロジェクションマッピングを核とした「天王洲キャナルフェス」が誕生したのです。昼間の集客のために縁日をはじめ子ども向けワークショップ、マルシェ、ミニクルーズ等も実施し、近隣地域の方々を中心に約3千人の来場者が訪れました。手応えを感じた私たちは、キャナルフェスを季節ごとに年4回開催し、各フェスでは、常に新しいコンテンツを追加することを決意しました。さらに、昼間の街の景観演出にも挑戦しました。

＜イベントから地域経済の活性化に向けて（跡見学園女子大学×パナソニック×天キャナ協）＞

年4回の天王洲キャナルフェスは、季節ごとに定期開催されるおしゃれなフェスとして、3万人を集客できる大きなイベントに成長しました。しかし、このにぎわいを毎日作らなければ、地域経済を活性化させることができないことも理解していました。地域経済活性化のためには、イベント時のように日常的に人が訪れるためのコンテンツを街の中に開発し、お金を使ってもらう仕組みづくりが必要でした。そこで、天王洲をアートによる文化観光拠点に転換するために観光地域づくり法人（DMO）設立を目指すことになりました。まさに「稼ぐ観光」をベースに、経済的価値を生み出す地域活性化に向けた活動が始まりました。

観光ＤＸを用いた回遊システム。謎解きイベントを併催するなど、回遊性のさらなる向上も図る

キックボードを活用したアートツアー

＜新たな都市観光の創造＞

天王洲の観光資源として、運河とアートがありますが、それだけでは観光客が訪れる魅力的なコンテンツにはなりません。プロジェクションマッピングなどの多くの実証実験を天王洲で重ねてきたパナソニックと、観光まちづくりを全国で手掛ける跡見学園女子大学観光コミュニティ学部との産学連携により「水辺とアート」をテーマに新たな観光コンテンツの開発に挑んでいます。

パナソニックが開発した非接触型遠隔コミュニケーションシステム「Attend Station」を用いて、アバターを大きなモニターに映し、来訪者と直接やりとりをするシステムの実証実験を行っており、将来的には、観光案内や各種ツアーの受け付けを行うことができるようになります。

天王洲を観光地としてコンバージョンするために、アート・テクノロジー・エンターテインメント・モビリティと知見を合わせた産学連携と、行政と地域社会と連携しながら都市型文化体験観光コンテンツの開発に挑戦しています。今後は、これらの実証実験を経て、さまざまな整合性を図り、稼ぐ観光商品へとブラッシュアップしていきます。

アートクルーズではレインボーブリッジ周辺を巡るコースも

ＪＡＬによる紙飛行機教室

また、クラウド型街巡りガイドサービス「Smart Town Walker」は、イベントアバターとして親しみやすいキャラクターが天王洲を回遊するガイドコンテンツで、アートツアー、謎解き、モビリティとコラボレーションした実証実験を行っています。「Smart Town Walker」を用いた謎解き問題を跡見学園女子大学観光コミュニティ学部の学生の皆さんに作ってもらい、来訪者が楽しみながら天王洲をくまなく巡れる回遊システムを実証実験しています。

――天王洲・キャナルサイド活性化協会の課題、今後と未来の展望、協会の取り組みに関する課題、そこから見据える今後の姿、描く未来像などについて。

＜イベントから街のプロモーション団体へ（観光地域づくり法人DMOの設立）＞

天王洲キャナルフェスは、地域住民にターゲットをしぼり、コンセプトを統一して企画していました。具体的には、主要メンバー3人が企画から運営までの責任者となってイベントは開催されます。イベントの運営は、事務局10人ほどで行いますが、当日はイベント運営会社やボランティアの支援も受けます。ただし、イベントの企画部分は、ナレッジやノウハウを協会に蓄積するために外部委託をしないことがルールです。情報共有は、毎週金曜日、定期的に行われ、主要メンバーは、イベントの趣旨、概要、費用について説明します。会議出席者は、質問や意見を述べます。イベントの内容については、自治体や町会が作成したまちづくりビジョンに沿って企画します。

また、イベントに関する許認可については、その都度、行政と協議しながら法令に沿って安全な開催を実現しています。近隣のまちづくり団体との関係は、人的・物理的（設備・備品等）な助け合いの関係を築きながら相互の街のビジョンを尊重しています。最後に大学は、ソリューションの宝庫であり、特に有識者（先生）からの指導は必須となります。また、学生の発想力や行動力も大きな活力となります。このような産学官民の連携を核としたイベント活動は、天王洲「共同体」意識の醸成を促し、イベントを通して多くのキャナルフェスのファンを作りました。そして何よりもキャナルフェスに来場していただく住民、企業で働く皆さんが天王洲のファンとなりました。キャナルフェスは8年間で28回開催しています。

このようにイベントを定期的に継続することにより天王洲キャナルサイド活性化協会は、イベントを核とした、まちのプロモーション団体に成長しています。

＜インバウンド観光客誘致の可能性＞

天王洲の水辺とアートを基軸とした回遊型観光促進のため、天王洲アートツアー、天王洲の周辺地域へのショートトリップ観光、クルーズ水辺環境を生かした飲食ができるくつろぎ空間の充実、観光客が回遊できる観光ＤＸを用いた観光の仕組み作りが必須です。特にモノレール天王洲アイル駅は羽田空港へのアクセスの乗り換え駅で、羽田空港に近接する地域でもあることから、国内外の観光客にとってフライト時間までのアイドリングタイムを充実させる最後の観光スポットになります。

また、日本へもう一度来てもらえるようなリピート施策なども盛り込むことにより、天王洲の発信だけでなく、日本各地の観光発信拠点となります。このような観光発信拠点を作ることにより、旅の終わり（始まり）は、「とりあえず天王洲へ」となることを願っています。

＜都市型文化観光地域づくりへ＞

現在、天王洲はオフィス街であり、またこの10年で湾岸地域には多くの高層マンションが建設され、近隣地域は都心のベッドタウンになっています。天王洲を観光スポットに成長させるには、地域関係者との共創、連携を推進し、観光客の受け入れ持続可能なまちづくりを促進させなければなりません。オーバーツーリズムなどの事象も考えると観光客があふれるにぎわいをつくるのではなく、地域の観光資源「天王洲らしさ」を考えた上で、新しい価値基準を決め、その価値を具現化した観光商品開発に挑むことが重要な課題です。

天王洲キャナルサイド活性化協会は、キャナルフェスを通して地域との絆を築いてきました。さらに今後は、地域住民の皆さんの応援もあり、観光という新しい分野に挑戦することができます。天王洲は、この先も歩みを止めることなく、「水辺とアートの街」の潤いのある観光地域づくりを目指していきます。

水上のステージで行われるライブの模様（写真上）は、対岸の建物の壁にプロジェクションで投映され（写真下、左中央）、沿岸にいる全員が一体となり楽しめる環境となっている

フェス会場では、さまざまなアート作品の展示や、アートと音を融合した催しなどが行われ、来場者をアートな空間へと誘う

「より上質なフェスへ」

23年秋冬の天王洲キャナルフェスが、11月2日から4日にかけて開催された。その最終日にも、近隣の住民を中心に多くの来客があり、今回のフェスも約計3万人の来場を記録。三宅氏は「3連休である点を考えると少し物足りないが、会場キャパを考慮すると十分な来場者数だった」と話す。

現在は土日祝を含む短期間、近隣エリアを軸、そして主対象とする同協会の取り組みだが、平日の通常期、東京都内や国内各地、そしてインバウンドへと、より広い期間、対象へのにぎわい創出を模索している。「もう一度キャナルフェスの原点に回帰して、クオリティーについて学生を交えてディスカッションをしたい」と三宅氏。同協会は、90年代前半とは異なる、当時以上に上質な、より多くの人を観光を通して取り込んでいける仕組みづくりやコンテンツ造成に今後も注力していく。

並ぶ店舗を歩くと、さんまを売る店舗が。そこには「この1店舗から全てが始まった」当時の気持ちを忘れないように」との三宅氏の思いが込められている